目次

眺海の館　5
一夜の宿り　87
マレトロワ邸の扉　115
神慮はギターとともに　145
寓話　189
宿なし女　253
慈善市　279
編者あとがき　285

眺海の館

赤星美樹訳

第一章は、グレイドン海岸林に野宿し、眺海の館に灯火を見た話

わたしのかわいい、聞き分けのよい子どもたちよ、天に召されるのを前にわたしは自分の記憶を整理してきたが、ついに、このときが来たと思っている。ここ半年というもの、日ごと、人間の脆(もろ)さを思い知らされてきた。手遅れになる前におまえたちの意をくみ、これまで何度となく知りたがっていたことを教えてあげよう。長いあいだ心にしまってきた秘密を、今こそ明かそう。この話は、これから先もずっと、ごく近しい人だけに伝わっていってほしい。かわいいわが子たちよ、これは誰にも知られてはならない。読んでいけば、その理由がわかる。ここで知ったこと、あるいは、ここで得た教訓以上の多くのものを、おまえたちに学んでほしいとわたしは願う。この物語は、不運な人や非がなくとも屈辱を与えられている人への深い思いやりの心を、わたしたち一族に教えてくれるに違いない。わたしにとってみれば、わが人生にかわいい天使が訪れた経緯(いきさつ)を話そうというのは、歓びであると同時に悲しみでもある。この出来事は、これから先も、わたしの心を揺さぶり続けるだろう。もし、わたしが何かしら価値ある存在、あるいは、多少とも善き父親であるならば、それはおまえたちの母さんのおかげであり、母さんへ寄せるわたしの愛と敬意がそうさせているのだよ。この愛と敬意は、それ自体がわたしの心を晴れやかにしただけでなく、さまざまな状況に遭遇したとき、わたしを導き、後押ししてくれた。人は自らの少年少女のころや、幼少のころばかりを賛美したり懐かしんだりして、

婚約者と愛を育んだ結婚までの日々を終わりの始まりのように振り返るが、わたしの場合は違う。わたしはそれまで自尊心もなく、自分の存在に興味さえなかったのだから。とはいえ、これからおまえたちが知るように、わたしたちが結婚を決めたときは疾風迅雷のごとき数日間で、おまえたちの母さんもわたしも、押し潰されそうな恐ろしい思いをそれは数多く経験した。あまりに特異な状況で、これを凌ぐ出来事は、少なくともこの時代のこの国ではそうそうお目にかかるまい。絶えることのない不安のなかで、わたしたちは愛し合うようになったのだよ。

若いころわたしは、およそ世捨て人のように生きていた。超然と、独り遊びに興じては、優越感に浸っていた。のちに妻となり子どもたちの母となる女性（ひと）と出会い、心打ち解けるまでは、友人も知人もいなかったといってよい。つき合いのある男が一人だけいた。名はR・ノースモア。スコットランドのグレイドン・イースターの大地主で、大学で知り合った。互いに好感を抱いていたわけでも、まして親交が深かったわけでもないが、似た者同士だったせいで、お互い気楽につき合えた。人間嫌い、とわれわれは自らを称したが、今にして思えば不貞腐れた輩だったにすぎない。交友などというものはなく、関わり合わず共に過ごすといった具合だった。ノースモアは尋常ならぬ激しい気性のもち主で、いかなる人間ともうまくつき合うことが難しかったが、わたしとだけは別だった。ノースモアは寡黙なわたしに干渉せず、好きなようにさせてくれたので、彼がそばにいてもわたしは気にならなかった。われわれは互いを友人と呼んでいたと思う。

ノースモアが学位を取り、わたしが学位をあきらめ大学を中退したとき、彼は、グレイドン・イースターでしばらく一緒に過ごさないかとわたしを誘ってきた。ここに語る冒険譚の舞台を、わたしはこのとき初めて知った。グレイドンの屋敷は、北海の岸から三マイル（約四・八キロメートル）ほど入った侘（わび）しい

一帯に建っていた。兵舎ほどの大きさで、軟質の石造りだったので海岸地帯の厳しい環境では摩耗しやすく、内側はじめじめしてすき間風が入り、外壁は崩れかけていた。こうした家屋で、青年二人が快適に過ごせるはずがない。だが、この屋敷とは別に、私有地の北側の、植林地と海に挟まれた荒涼たる砂地の草原（リンクス）と風吹きすさぶ砂丘の中に、当世風の設計の望楼のような、海を眺める小さな館が建っていた。われわれにとっては、まさに願ったり叶ったりの住処だった。この隠れ家で、ノースモアとわたしはほとんど会話もせず、大いに読書し、食事以外はめったに行動も共にせずに嵐が荒れ狂う冬の四カ月を過ごした。もう少し長く滞在してもよかったのだが、三月のある夜、二人のあいだに諍いが起こり、わたしはここを去らざるをえなくなった。ノースモアが語気を荒らげたのを今も思い出す。そして、おそらく、わたしが何かしら辛辣な言葉を返したのだろう。彼は椅子から跳び上がると、わたしにつかみかかった。大袈裟ではない、わたしは命を守るために取っ組み合いをやらざるをえなくなり、やっとのことで相手を抑え込んだ。体力はわたしにわずかに劣ったが、この男には悪魔が宿っているかに思えた。翌朝、いつもと変わらず二人は顔を合わせたが、ここは立ち去るのが慎みとわたしは判断し、彼もわたしを引き止めなかった。

それから九年が経ち、わたしは彼（か）の地方をふたたび訪れた。このときわたしは小さな荷車とテントと調理用の釜を携え、旅をしていた。日中は荷馬車の傍らをとぼとぼ歩き、夜は時刻かまわず、丘の洞穴や木の下で眠った。こうして、イングランドとスコットランドの、荒れ果てた不毛の地のほとんどに足を踏み入れたのではないかと思う。わたしには友人も親戚もなかったので、年に二回、事務弁護士の事務所から収入を受け取るときを除いては、手紙を書く煩わしさもなければ、本拠といったたぐいもなかった。わたしはこの生活を楽しんでいた。長く旅するうちに齢（よわい）を重ね、最後は野垂れ死ぬ

ものと疑っていなかった。いや、おまえたちの母さんに出会っていなければ、そうなっていたはずだ。

やるべきことといえば、何にも邪魔されずに野宿できる、人けのない土地の片隅を探すだけ。そういうわけで、彼の州のほかの場所にいるときに、ふと思いついたのが砂地の草原に建つあの眺海の館だった。周囲三マイル以内に街道は通っておらず、最寄りの町までは、といっても漁村にすぎないが、六、七マイル（約九・七から一一・三キロメートル）離れている。この不毛の一帯は帯状に海に沿っていて、長さは海岸線上に一〇マイル（約一六キロメートル）、幅は内陸側に三マイルから半マイル（約〇・八キロメートル）あった。ここを訪れるには、普通は浜から上陸することになるのだが、浜辺の砂はほとんどが流砂（水を含み半液体状になった流動しやすい砂。流砂地帯は底なし沼と呼ばれることもある）だった。連合王国じゅうで、身を隠すのにここより適した場所はまずないだろう。わたしはグレイドン・イースターの海岸林で一週間を過ごそうと決め、長い道のりのすえに、荒れた天気の九月のある日、夕暮れのころ、その地にたどり着いた。

この一帯は、前述のとおり、砂丘と砂地の草原が入り組んでいた。リンクスとはスコットランド語で、海岸に打ち寄せられた砂が、程度の差こそあれすっかり芝草に覆われてしまった土地を指す。眺海の館は平坦な場所に建っていた。館の裏手の少し離れたところには、海風が吹きつけるせいで密集したニワトコ（スイカズラ科の落葉低木）の林が垣根のように広がっている。館の正面から海までのあいだには崩れた砂丘がいくつかあった。岩の露出した場所があり、砂地を守る要塞のように見えた。つまり、海岸線のこの部分は、二つの浅い入り江に挟まれた岬になっていた。そして、潮流のすぐ向こうにも岩がもう一つ露出し、小さいながらも奇抜な形の島をなしていた。干潮時には流砂の範囲がとてつもなく広がり、この地方に忌まわしい噂を生んだ。小島と岬に挟まれた海岸付近では、流砂が人ひとりを四分と半で飲み込むという。とはいえ、この厳密な時間に、根拠などほとんどなかったに違いない。こ

のあたりはウサギが跳ね回り、カモメもたくさん飛んでいて眺海の館のまわりで始終甲高い声で鳴いていた。夏のあいだは見渡すかぎりきらめいて心も踊らんばかりだったが、九月の夕暮れどきともなると、風が吹きすさび、巨大な波が砂地の草原（リンクス）に沿ってすぐ近くまで打ち寄せ、命を落とした船乗りと海難の物語が聞こえてくるようだった。水平線で風に逆らい進もうとしている船と、足元の砂に半分埋もれた難破船の巨大な帆柱の残骸が、物語の暗示する光景を揺るぎないものにした。

眺海の館は、ノースモアのおじである、美術愛好家でおめでたい道楽者の先代が建てたのだが、このときも経年をほとんど感じさせなかった。二階建てで、イタリア風の設計。まわりを囲む小さな庭は雑草がちらほら花をつけているだけで、あとはがらんとしていた。鎧戸が閉まり、住人不在というより、そもそも誰も住んだことがないように見えた。ノースモアがいないのは一目瞭然だった。いつものように不貞腐れて帆船の船室にこもっているのか、それとも、ときおりあるように血迷ってふらふら人里に出没しているのか、当然ながら、わたしには知る由もなかった。あたりは寂寥として、わたしのように孤独に生きる者さえひるませた。煙突の中で、風が不気味にむせび泣いている。ここから逃げるのが安全な場所へ身を置くことのような気がして、わたしは館に背を向けると、荷車を押して林の入り口から奥へと進んでいった。

グレイドン海岸林はその裏側にある耕作地の防風林として、また、吹き飛んでくる砂を防ぐために植林された。海岸側から足を踏み入れると、まずニワトコが、次に、また種類の違う耐寒性の低木が現れた。だが、木の幹はみな、生育を妨げられて密集していた。木々は日々闘っていた。冬は激しい嵐の中で一晩じゅう揺さぶられるのが常で、早春ですら葉はもはや飛び散って、この吹きさらしの植林地では季節はすでに秋だった。土地は内陸に向かってせり上がり、小高い丘をなしていた。この丘

は、例の小島とともに、航海中の船乗りの目印の役割を果たしていた。小島の向こうの北方向に丘が見えてきたら、船はうまく東へ舵を取って、グレイドン岬とグレイドン岩場を通過しなければならない。丘の麓のあたりには、木々のあいだを縫って小川が一筋流れていたが、枯葉やら上流から運ばれてきた泥土やらに堰き止められて、あちこちで水が溢れ出し、淀んで水たまりをつくっていた。林のまわりには、ぽつりぽつり立ち腐れた小さな家屋があった。ノースモアによると、これらは聖堂の跡地で、使われていたころは敬虔な隠修士の住居だったらしい。

わたしは穴というか、小さな窪地を見つけた。澄んだ水が湧き出している場所だった。周囲のイバラを刈り取ったわたしは、テントを張ると、料理のための火を熾した。馬は、林のさらに奥の、草が生えた一画につないだ。穴を囲む土手は、熾した火の明るさを隠してくれるだけでなく、激しく冷たい風からわたしを守ってくれた。

これまで送ってきた生活のおかげで、わたしは体が頑健に、また質素に耐えられるようになっていた。水以外は飲まず、オートミールより贅沢なものは滅多に口にしなかった。睡眠もほとんど必要なかったので、今でも夜明けには起き出すけれど、当時は日が暮れると暗闇の中で、あるいは星空を眺めながら、体を横たえたままいつまでも寝ずにいることもしばしばだった。グレイドン海岸林ではありがたいことに午後八時には眠りにつけたものの、そういうわけで、一一時になる前にふたたび目を覚ましたときは、頭も冴え体も元気で、眠気も疲労も感じていなかった。わたしは起き上がり、火のそばに腰を下ろして、木々と、頭上を狂ったように飛んできては去ってゆく雲とを眺め、風や、岸に打ち寄せる大波の音に耳を傾けた。そのうちに、何もせずにいるのに飽きてきて、穴から出ると、林のはずれに向かってとぼとぼ歩きだした。上弦の月は霧に隠れ、足元をぼんやり照らすだけだったが、

砂地の草原の中へ入っていくにつれ明るさを増した。と、一陣の強風が外洋の塩の香りと砂粒をともなって、力いっぱいわたしを打ち、わたしは思わず頭を下げた。

ふたたび顔を上げ、あたりを見渡すと、なんと眺海の館に明かりが一つ灯っているではないか。据え付けの照明でなく、灯火は窓から窓へと移動し、誰かがランプか蠟燭を手に部屋を一つひとつ見回っているかに見えた。わたしは大いに驚き、灯火をしばし見守った。その日の午後に訪れたときは明らかに人はいなかったが、今は明らかに人がいる。盗賊団が侵入し、ノースモアの持ち物がぎっしり詰まったあちこちの戸棚を今まさに物色しているのではないだろうかと初めは考えた。しかし、盗賊がグレイドン・イースターに来ることがあろうか。しかも、鎧戸がすべて開け放たれている。そうした連中なら鎧戸は閉めておくものだろう。盗賊団ということはありえない。次に、別の考えが浮かんだ。ノースモアが来たに違いない。館の中に風を通し、点検でもしているのだろう。

この男とわたしのあいだに真の友情がなかったのは、前述のとおりだ。いずれにしろ、この男に抱く感情が兄弟愛のようなものだとしたなら、それよりわたしは孤独を愛する気持ちのほうがずっと強かったので、愛はあったにせよ、彼と共に過ごすのはごめんだった。そういうわけで、わたしは踵を返し、そこから逃げ出した。そして、焚き火のもとへ無事に戻ってきたときは、心から安堵した。対面を免れた。もう一晩は、ゆっくり過ごすことができる。夜が明けたらノースモアが外に出てくる前にこっそり立ち去るか、それとも、気の赴くままに軽く挨拶だけしておくか。

ところが朝になると、この状況がとんでもなく愉快な気がして、わたしは自分が人嫌いなことをすっかり忘れてしまった。ノースモアはわたしのなすがままだ。この隣人がまったく冗談の通じない相手なのはよくわかっていたが、わたしは気の利いた冷やかしの段取りをつけた。そして、成功したと

きの場面を思い描き、含み笑いしながら、館の玄関が見える林のはずれのニワトコの茂みに陣取った。鎧戸がすべてふたたび閉まっていたので、はて、と訝ったのを今も思い出す。白壁に緑のヴェネツィア式窓のついたその館は、朝陽を浴びるなか、洒落て住み心地がよさそうに見えた。数時間が過ぎたが、なおノースモアの気配はなかった。あの男が午前中はのらりくらりしているのは知っていたが、正午が近くなると、わたしはしびれを切らせた。実をいうと、朝食はここでとらせてもらおうと思っていたので、耐え難い空腹に襲われ始めていた。大笑いもできぬままに、その機会をみすみす手放すのは実に残念だったが、空腹はひどくなる一方だったので、後ろ髪を引かれつつ、冷やかしの計画はあきらめ、わたしは林を飛び出した。

館に近づくにつれ、その様子に胸が騒いだ。前日の夕刻と、なんら変わらぬように見えるではないか。人のいる気配が外側に何かしら感じられるだろうと、根拠はないものの思っていたが、当てがはずれた。窓はすべて鎧戸が固く閉ざされ、煙突から出る煙もない。正面玄関の扉には、しっかり南京錠がかかっている。ならば、ノースモアは裏口から入ったのだろう。そう考えるのが自然だし、そう考えるしかあるまい。館の裏側に回り、裏口も同じく南京錠がかかっているのを見たときのわたしの驚きようは、おまえたちにも察しがつくだろう。

やはり最初に考えたとおり盗賊団だったのだと、わたしはすぐに思い直した。そして、前の晩、手を拱いていたことにひどく責任を感じた。そこで、一階の窓を残らず確認してみたが、こじ開けられた形跡はない。南京錠もいじり回してみたが、正面玄関も裏口もしっかりかかっている。となれば、盗賊は、もし盗賊だとしたら、どうやって押し入ったのか。推測するに、ノースモアが写真撮影用の器具一式をしまうのに使っていた差し掛け小屋の屋根に上ったのではないだろうか。そして、屋根か

ら書斎、あるいはわたしがかつて使っていた寝室の窓を破り、侵入を果たしたに違いない。
自分の推測した方法に従い、まず屋根に乗り、それぞれの部屋の鎧戸を開けようとした。両方とも閉まっていたがあきらめず、力をわずかに込めると、そのうち一つが勢いよく開いた。このとき手の甲を擦りむいた。傷を口元にもっていき、おそらく三〇秒ほど、その姿勢のままイヌのように舐めたのを今も憶えている。そして、何気なく振り返り、荒れ果てた砂地の草原と海を眺めた。すると、北東方向の数マイル先に大型の帆船が浮かぶのが、わたしの目に映った。そのあと、わたしは窓を開けつつ放ち、よじ登って中へ入った。
家じゅうを見て回ったが、このときの当惑は言い表せない。荒らされた様子など一切なく、それどころか、どの部屋も意外なほど居心地よさそうに片づいている。暖炉はいつでも火が点く状態で、三つある寝室は、普段のノースモアと結びつかないほど贅沢に整えられ、水差しには水が、ベッドはすぐに眠れるよう覆いがはずされていた。食堂には三人分の食器が並び、配膳室の棚には冷肉と猟獣肉と野菜がたっぷり用意してあった。客人の予定があるのだ。それは明白だ。だが、なぜ客人が。人づき合いを好まぬノースモアのところに。そして何より、家の中はなぜ真夜中にこっそり整えられたのか。なぜ鎧戸が閉められ、扉には南京錠がかかっているのか。
わたしは侵入した形跡を残らず消し、すっかり冷静になって首をひねりながら、窓から外へ出た。帆船はまだ同じ場所に留まっていた。その瞬間、ひょっとしたらあれは〈レッド・アール号〉で、眺海の館の所有者とその客人を乗せてきたのではあるまいかと、ぴんと来た。だが舳先は反対側を向いている。

第二章は、夜中に帆船から人が下りてきた話

わたしは穴に戻ると、腹が減ってたまらなかったので食事をつくり、また、午前中いくぶん疎かにした馬の世話をした。ときおり林のはずれまで行ってみたが、館は相変わらずで、砂地の草原（リンクス）には人っ子一人現れないまま日中が過ぎていった。目の届くかぎりで、人の気配をわずかながら感じさせるものは沖合の帆船だけだった。船は一見したところ明確な目的地がないように、何時間ものあいだ遠ざかったり近づいたり、あるいは舳先を風上に向けて留まったりしていた。ところが、夕刻が深くなるにつれ、だんだんとこちらへ近づいてくるではないか。やはりノースモアと彼の友人を乗せていて、陽が落ちてから上陸するつもりだろうと、わたしは確信を強くした。夜に上陸するのは滞在の準備がこっそりなされたのと同じ理由だろうが、理由はもう一つあった。午後一一時を過ぎないと潮が充分に満ちず、よそ者が海から侵入するのを防いでいるグレイドン流砂地帯とその周囲の泥地が隠れないのだった。

日中にかけて風が徐々に弱まり、それとともに海は凪いでいたが、日没が近づくにつれ前日の悪天候がぶり返してきた。夜になり、あたりは漆黒の闇に包まれた。海から突風が、大砲の弾のように吹きつけた。ときおり雨も激しくなり、大波は上げ潮と相まって、いつにも増して荒々しく打ち寄せた。わたしがニワトコの茂みに定めた見張り所にいると、帆船の帆柱の先端に灯火がするすると高く掲げ

〔著者〕
ロバート・ルイス・スティーヴンソン

本名ロバート・ルイス・バルフォア・スティーヴンソン。1850年、スコットランド、エディンバラ生まれ。結核の転地療養として各地を転々とするなかでエッセイや小説を執筆する。代表作の「宝島」(1883)や「ジーキル博士とハイド氏」(86)は世界各国で古典として読み継がれている。1894年、脳溢血により死去。

〔編訳者〕
井伊順彦(いい・のぶひこ)

早稲田大学大学院博士前期課程(英文学専攻)修了。英文学者。編訳書に『自分の同類を愛した男』、『世を騒がす嘘つき男』(「20世紀英国モダニズム小説集成」。ともに風濤社)など。訳書に『アリントン邸の怪事件』、『必須の疑念』(ともに論創社)など多数。英国のトマス・ハーディ協会、ジョウゼフ・コンラッド協会、バーバラ・ピム協会の各会員。

眺海の館(ちょうかい やかた)
——論創海外ミステリ 237

2019年7月20日　初版第1刷印刷
2019年7月30日　初版第1刷発行

著　者　ロバート・ルイス・スティーヴンソン
編訳者　井伊順彦
装　丁　奥定泰之
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254　FAX:03-3264-5254　振替口座 00160-1-155266
WEB:http://www.ronso.co.jp

印刷・製本　中央精版印刷
組版　フレックスアート

ISBN978-4-8460-1833-7
落丁・乱丁本はお取り替えいたします